

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 巽 由樹子 印

学位申請者 石丸敦子

論文名 核以後の世界を生きる

—証言文学『チェルノブイリの祈り』の形式をめぐって

石丸敦子氏から博士学位請求論文「核以後の世界を生きる—証言文学『チェルノブイリの祈り』の形式をめぐって」が提出されたことをうけ、2022年3月9日開催の総合国際学研究科教授会にて審査委員会が選任され、審査が開始された。

審査委員会は、巽由樹子（本学准教授、ロシア史）が主査を務め、米谷匡史（本学教授、日本思想史・アジア論）、久野量一（本学教授、ラテンアメリカ文学）、本橋哲也（東京経済大学教授、英文学・カルチュラルスタディーズ）、岩崎稔（本学名誉教授、元主任指導教員、哲学／政治思想）という5人の委員から構成されている。なお、同論文は、2022年1月に事前審査を受け、その際の助言と承認に基づいて改訂されたうえで提出されていた。

審査委員会は、各委員がそれぞれの見地から論文を精査し、詳細に吟味した上で、対面形式での最終試験を実施した。その結果、本委員会は全員一致で石丸敦子氏に博士（学術）の学位を授与することが適切であるという結論に至った。

【論文の概要】

本論文は、2015年にノーベル文学賞を受賞したスヴェトラーナ・アレクシエーヴィチの作品『チェルノブイリの祈り』（以下『祈り』と略記する）を主要な考察対象としている。『祈り』の形式的な特性とそこに埋め込まれている創作上の仕掛けなどを詳細に検討することで、その文学的可能性を丁寧に掬いだし、さらにその作品の文明論的な問いや宗教的含意まで考察した研究論文である。作家アレクシエーヴィチは、本学の沼野恭子教授らによる紹介もあって、日本語圏でも『祈り』だけでなく『戦争は女の顔をしていない』や『セカンドハンドの時代』などが多くの読者を獲得してきている。しかし、アレクシエーヴィチ作品の現代世界に対する痛切なアクチュアリティは認められてはいるものの、それ自体を文学作品として内在的に考察した仕事は必ずしも多くはなく、いまだ研究の途上にある。そのなかで、本論文は、文学作品としてのアレクシエーヴィチの世界に本格的に取り組んだ独自の試みであると言える。

周知のように、ウクライナのチェルノブイリ原子力発電所で1986年に核爆発事故が発生し、世界を震撼させた。放射線の被害は、ソ連体制の秘密主義や硬直性によって拡大

し、ウクライナだけでなく、隣接するベラルーシやロシア各地、そしてヨーロッパ全域にまで及んだ。爆発した原子炉は、結局は解体不可能なまま、ただ巨大な石棺で覆って放置され、膨大な年月の半減期を待つしかないという状態になっていることは、本年のウクライナ侵攻でロシア軍がその地を一時占拠したことであらためて想起されることとなった。

アレクシエーヴィチは事故直後から汚染地に入って取材し、被災した人々の声を聴き取り、その証言をもとにして1997年に本作『祈り』を上梓した。証言者は、被爆した周辺住民、事故処理に投入された軍関係者とその家族、関与した幹部など、多様なひとびとに及んでいる。なかには、チェルノブイリ地域からいったんは避難しながら、その後帰還困難区域にもどって、死の危険とともに暮らす「サマシオール」と呼ばれる一群の人びとも含まれる。

一般に『祈り』は「証言文学」のひとつとして位置づけられるが、石丸氏はこの規定に徹底してこだわった。その際石丸氏が反駁の対象として意識しているのは、しばしばアレクシエーヴィチに与えられる「聞き取った声を並べたものに過ぎない」という安易な評価である。石丸氏は、アレクシエーヴィチが聞き取った証言のそれぞれのあいだの関係性や、そこに浮かび上がるプロットを細かく跡づけることで、『祈り』が実は仕掛けに満ちた構築物であり、それを通じて特異な出来事の意味を浮かび上がらせた試みであったことを論証しようとしている。そのことは、『共観福音書』を、「神の子イエスの事績」がマタイ、ルカ、マルコというそれぞれ異なった同時代的証言者の語りによって構成されたテキストとして理解する立場に倣うことだという。

本論文の目次構成は以下の通りである。

序章

第1章 『チェルノブイリの祈り』の構成と読解の方法論

第2章 証言文学であること

第3章 「愛する罪と愛による救済」のプロット

第4章 証言間の対話

第5章 全体の流れともうひとつのサブ・プロット

第6章 演劇の形象

第7章 タイトルのなかの「祈り」とは

第8章 証言文学であることの必然性

終章

補論 チェルノブイリ／フクシマ

各章の要旨を簡潔に示しておこう。

第1章は、先行研究を概観するとともに、『祈り』の組み立てを俯瞰している。その際、石丸氏は、『祈り』が演劇形式を意識して組み立てられているという仮説を積極的に提示

し、とくにそれが、古典古代劇のコロスを意識した作り立てとなっているという。

第2章は、「証言文学」というジャンルの意味を普遍的に考察している。石丸氏によれば「証言文学」が志向しているのは、歴史の中に消されていく個々の人々の記憶に寄り添う姿勢である。それは、ときに貶められてレッテル貼りされる垂流の文学などではなく、むしろ逆に、散文の限界を押し広げる可能性さえ持つ固有の文学ジャンルであると強調されている。

第3章は、『祈り』の最初と最後に位置する二つの特別な証言であるリュドミーラとワレンチナの語りに焦点を絞る。彼女たちがその愛によって、それぞれの夫に尊厳ある死を迎えさせようとした出来事について詳細に考察している。石丸氏は、愛にまつわる証言を抜き出して読んでみると、そこに一つのプロットが、やはりアレクシエーヴィチの仕掛けとして浮上してくるとも指摘する。それを石丸氏は「女性たちが崇高なまでの愛によって思考することによって、自分の主体性を核被害よりも優位に据えるという生き方」なのだという。

第4章からは石丸氏は、すべての証言の内容をひとつずつ解釈していくという細かい作業に入る。それによって、証言の配置が、内的対話を生み出していることを示そうとするからである。これを石丸氏は、アレクシエーヴィチの重要な美的技法と見ている。

第5章でも証言間の関係が問題となるが、今度はそれらを違う視角から見ることで、たとえば「身体からロゴスへ」と表現されるような別のプロットなどが浮かび上がるという。石丸氏はこれらが結果としてソ連時代を生きた人々の「民衆史」とでもいふべきものにあたりと見ている。ソ連邦のイデオロギー教育が国家に奉仕する身体を作っていたこと、だからこそ多くの人々がわが身を危険にさらしてチェルノブイリの除染作業に邁進したこと、加えて、ソ連崩壊の後には、自分たちの行為にあらためて冷ややかな振り返りのまなざしを投げかけるときが訪れていたことを、ひとつひとつ確認している。

第6章は、『祈り』が帯びている演劇的な形式性の問題にあらためてたちもどり、『祈り』における悲劇性という位相について考察する。石丸氏は、コスという形式が工夫されているかぎり『祈り』はたしかにある悲劇を伝えるものではあるにしても、原発事故によって人間と生命の存立可能性そのものが崩壊してしまうような究極的な事態のなかでは、それはおのずから美的悲劇の形式性そのものすら解体した地平にまで、言い換えるならメタ悲劇というべき形式としてしてしか成立しない文明論的認識にまでたどり着いているとする。

第7章では、『祈り』の証言群に表れる宗教的な契機に着眼している。未曾有の惨禍のなかでの「祈り」という姿勢には、ロシア民衆の正教に裏打ちされた精神性が見出されるのではないかと考えたからである。石丸氏は、その場合の「祈り」とは、自分の経験を分析し、批判し、自分の真理が獲得される過程としての反省的思考としての「祈り」でもあるとしている。

第8章では、証言が多くの場合に帯びている犠牲者としての聖性とでもいふべき特異な

姿について、そこにあえて「神話的なもの」とも呼ぶべき契機が含まれているということも補っている。

終章は、本論文が最初に立てた課題に立ち返るとともに、『祈り』が文明論的危機の問題を提示している特別なテキストであると結論づけた。それは、チェルノブイリ以後の世界で人間はいかに生きることが可能なのかという、未来に対する課題を追求することでもある。

なお、本論文には補論として、直接には『祈り』を論じたわけではないもうひとつのモノグラフがついている。石丸氏は、「フクシマ」を想起することなしにチェルノブイリを語ることはできないと考えるからである。そういった点から、木村朗子とアンヌ・バヤール＝坂井が編集した話題作『世界文学としての〈震災後文学〉』のなかから、現在のフクシマに関する議論を切り取って、そこに『祈り』についての考察の延長上の問題系が横たわっているとしている。

【審査の概要および評価】

上記の論文をめぐり、2022年6月18日午後に本学海外事情研究所会議室（427）にて実施された公開最終試験では、初めに石丸敦子氏が論文の意図と達成についてプレゼンテーションをおこない、その後各審査委員と石丸敦子氏の間で以下のような質疑応答が行われた。

総じて審査委員は、本論文が、①作品を精緻に分析し、なかでも証言がさまざまな文体論的な工夫によって詩的表現にまで高められていることを実証的に示していること、②第一章から第三章にかけての証言内容の移り変わりを「身体からロゴス」としてとらえるときの解読の手際が説得的であること、③「ソ連民衆史」という位相に降り立って考察していること、④『祈り』における作者のオーケストレーション、さまざまな演劇的仕掛け、そして文明史の極北を描く「メタ悲劇」についての分析などは、とくに評価できること、などを挙げて高く評価した。

しかし、審査では同時にいくつかの疑問点も指摘され、石丸氏自身のさらなる見解を問い尋ねるやり取りもあった。

石丸氏が一貫して拘泥している「証言文学」というカテゴリーについて、それが散文の限界や芸術の限界を押し広げていると高く評価する姿勢は、反面で、実は既存の文学に備わっている美点や特質のなかに、あるいは既存の文学ジャンルの中に、証言文学を位置づけることにこだわりすぎているのではないだろうか、という指摘が複数の委員から行われた。また、作品にまつわる宗教的な契機を論じるにあたって、『祈り』の舞台が宗教と民族の入り組んだ旧ソ連南西地域であったにもかかわらず、それを北部中心のロシア正教のなかに論拠を求めすぎていて一面的である、という指摘もあった。さらに、「記憶の場」「生政治」「民衆史」「ポリフォニー」といった、思想史や歴史学のなかでそれぞれ固有の文脈をもっている言葉を、議論の展開における鍵概念としてやや性急に用いてしまって

いるところがあり、そのために議論を最後まで固有の言葉で描き切ることができていない箇所があるという批判などもあった。

以上のような疑問や指摘に対して、石丸氏の応答はその都度、的確であり、自らの論考で明らかにし得た点とその限界、今後に残された課題について明確に自覚していることが見て取れた。また、委員による上記の疑問や指摘は、本論文の達成や貢献を高く評価した上で、それをさらに深めていくために提示されたものであり、その研究の意義を損ねるものではないことが審査委員の共通認識であった。

【審査の結果】

以上の審査をふまえて、審査委員会は全員一致で、石丸敦子氏の博士学位請求論文「核以後の世界を生きる－証言文学『チェルノブイリの祈り』の形式をめぐって」は、ノーベル文学賞受賞者スヴェトラーナ・アレクシエーヴィチの作品世界を読解するために独自の貢献をはたす研究成果であると確認し、石丸敦子氏に博士（学術）の学位を授与することが適切であると結論した。